

小西和と瀬戸内海

さぬき市教育委員会 生涯学習課 課長補佐(学芸員)

山 本 一 伸

1. はじめに

小西は、1873(明治 6)年 4 月 26 日、現在の香川県さぬき市(長尾名)で誕生し、1947(昭和 22)年 11 月 30 日に永眠、74 年の生涯を閉じた。(P22 表 1 参照)

彼の主な功績としては、(1)北海道開拓功労者の一人、(2)「瀬戸内海」の国立公園指定化に貢献、以上 2 点があげられる。

その中で、今回は、瀬戸内海が国立公園に指定され 90 周年の節目となる事から、瀬戸内海との具体的な関わり的一端が読み取れる資料を紹介し、各時期の主な活動からうかがえる小西の人物像も紹介したい。

2. 瀬戸内海との関わり的一端が読み取れる資料

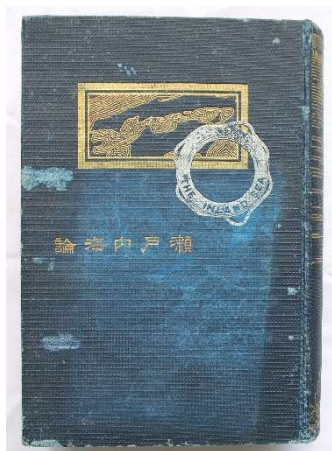
1 尋常中学校時代の日記帳〔1888(明治 21)年〕



この日記帳は、1888(明治 21)年 伊予尋常中学(現松山東高校)に進学する頃から翌 1889(明治 22)年 岡山尋常中学校(現岡山朝日高校)に転校する頃の様子を記している。

その中に、自宅のある長尾から高松に向かい、高松港から乗船し松山三津浜港まで航路で向かったり、風が激しく船が出なかった時もある事が記されており、小西が筆まめであることも伝えている。

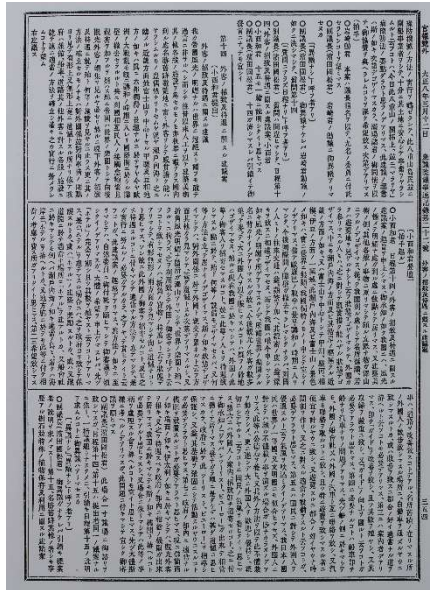
2『瀬戸内海論』〔1911(明治 44)年〕



小西の代表的著書で、瀬戸内海の魅力を総合的に論じた書物として 1911(明治 44)年 12 月 8 日に刊行された。

その序文中、瀬戸内海の研究を行う動機について述べているが、日露戦争従軍記者として現地の状況を克明に伝えた後の帰国船上、船が関門海峡に入った時の景色の美しさに、瀬戸内海に対する感情が頂上に達した事が記されている。

3「外客の招致及び待遇に関する建議案」〔1919(大正 8)年〕



小西が 1919(大正 8)3 月の国会で提案したものである。この提案は、大隈内閣の総辞職に伴い国立公園の検討が休止していた動きを再開させる契機となると評価されている。小西は、この提案により瀬戸内海を国立公園にするための具体的活動を開始したようである。

4「東京朝日新聞・大阪朝日新聞、香川新報の連載記事」〔1921(大正 10)年〕



1921(大正 10)年から「国立公園の父」と称される田村剛が内務省の公園行政担当となり、国立公園設置の調査が本格的に着手された。この調査は全国に関心事となり全国各地から国立公園選定要請が出される動きとなったが、当時は山を中心とする考え方が主流であったため瀬戸内海に対する評価は低いものであった。そこで、小西は落選期ではあったものの、東京朝日新聞・大阪朝日新聞、香川新報(現四国新聞)の連載記事を通じて、瀬戸内海を国立公園にすべきであると訴えた。

5「国立公園に関する建議案」〔1925(大正 14)年〕

1924(大正 13)年 5 月 10 日の第 15 回衆議院議員選挙において小西は返り咲き、翌 1925(大正 14)年の本会議において瀬戸内海の国立公園化について専門的な調査研究が必要であることを強く訴えている。この時期は、瀬戸内海が国立公園選定リストに入っているものの、「瀬戸内海の或区域」であり、具体的な範囲が示されていない状況であった。また、日光、琵琶湖、磐梯山猪苗代湖なども国立公園設定に関する建議案も提出され、国立公園に向けた取り組みが活発になっていた頃でもあり、小西は瀬戸内海の範囲をより専門的な見地から検討することが必要だと考えたことがうかがえる。

表1 小西和 主要年譜

西暦	元号	年齢	小西 和 主要年譜	西 暦	元 号	日本・世界の主なできごと	
1873 年	(明治 6 年)	0 才	4月26日 小西弥七郎、トラの二男として生まれる。幼名和太郎。	1876 年	(明治 9 年)	日朝鮮好条規	
1877 年	(明治 10 年)	4 才	2月 上名の蓮井石溪師匠の寺子屋に学ぶ。	1877 年	(明治 10 年)	西南戦争	
1888 年	(明治 21 年)	15 才	立教学校、開進学校を経て、愛媛県伊予尋常中学(現松山東高)に入学。日記帳、小遣い帳を書き残す。	1880 年	(明治 13 年)	国会開設の請願	
1889 年	(明治 22 年)	16 才	交通の不便さから岡山尋常中学(現朝日高校)に転校	1881 年	(明治 14 年)	国会開設の勸諭 自由党の結成	
1890 年	(明治 23 年)	17 才	札幌農学校(現北海道大学)を受験し合格	1882 年	(明治 15 年)	三国同盟(ドイツ・オーストリア・イタリア)	
1891 年	(明治 24 年)	18 才	9月札幌農学校予科入学(～8月/予科1学年)	1889 年	(明治 22 年)	大日本帝国憲法発布	
1892 年	(明治 25 年)	19 才	夏休みを利用して北海道一周旅行。旅行記を香川新報に掲載。	1890 年	(明治 23 年)	第一回帝国議会	
1893 年	(明治 26 年)	20 才	北海道石狩国栗津村(現岩見沢市)に「小西農場」設立を計画。同郷の小西腎基之助に園有林払い下げをお願いする。 4月 農場開設に着手。農業監督者を置き、和太郎自身は土曜日に来村し、月曜日は学校へ帰るといった多忙な生活過ごす。	1894 年	(明治 27 年)	領事裁判権の撤廃に成功 日清戦争(～95) 下関条約(95)	
1894 年	(明治 27 年)	21 才	9月父の戒めを受け札幌農学校を退学し、小西農場に移り農業に専念。 郷土の宇佐神社より分室を受けて社殿に祀る。	1895 年	(明治 28 年)	三国干渉(ロシア・ドイツ・フランス)	
1896 年	(明治 29 年)	23 才	和太郎を和と改名する。	1900 年	(明治 33 年)	義和団が列強の公使館をおそう	
1898 年	(明治 31 年)	25 才	大水害が発生。小作料未納や困窮者援助で負債がふくらむ。	1902 年	(明治 35 年)	日英同盟	
1899 年	(明治 32 年)	26 才	4月 治子と結婚。 12月 農場経営が破綻し上京。	1904 年	(明治 37 年)	日露戦争(～05) ポーツマス条約(05)	
1901 年	(明治 34 年)	28 才	小西農場は人手に渡る。東京市役所へ勤務。	1905 年	(明治 38 年)	シベリア鉄道が完成する	
1903 年	(明治 36 年)	30 才	東京朝日新聞社入社、編集局学芸部付記者となる。	1907 年	(明治 40 年)	三国協商(イギリス・フランス・ロシア)	
1904 年	(明治 37 年)	31 才	村山龍平社長の特命で日露戦争従軍記者として満州に渡る。	1910 年	(明治 43 年)	大逆事件 韓国を併合する	
1905 年	(明治 38 年)	32 才	さらに樺太・シベリアでも取材を行う。日露講和により帰国。社より1年間の慰労休暇と特別賞を受ける。 瀬戸内海の学術調査に着手。	1911 年	(明治 44 年)	関税自主権を回復する 辛亥革命	
1906 年	(明治 39 年)	33 才	10月「日本の高山植物」刊行。	1912 年	(大正 元 年)	第一次護憲運動おこる 中華民国成立、清朝ほろびる	
1908 年	(明治 41 年)	35 才	長尾宇佐神社へ桜樹2500本を献木。	1914 年	(大正 3 年)	第一次世界大戦(～18)	
1911 年	(明治 44 年)	38 才	「瀬戸内海論」発刊。	1915 年	(大正 4 年)	中国に二十一ヶ条の要求を出す	
1期目	1912 年	(大正 元 年)	39 才	5月 香川県より第11回衆議院議員に初当選。	1917 年	(大正 6 年)	ロシア革命
2期目	1915 年	(大正 4 年)	42 才	3月 香川県より第12回衆議院議員に2回目当選。	1918 年	(大正 7 年)	米騒動 シベリア出兵(～22) 原敬の政党内閣
	1916 年	(大正 5 年)	43 才	4月 勲四等を叙し、瑞宝賞を受賞。 南満洲製糖株式会社創立。常務取締役に就任。	1919 年	(大正 8 年)	ベルサイユ条約 三一独立運動 五・四運動
3期目	1917 年	(大正 6 年)	44 才	4月 香川県より第13回衆議院議員に3回目当選。	1920 年	(大正 9 年)	国際連盟発足
	1919 年	(大正 8 年)	46 才	3月 帝国議会に「外客招致及び待遇に関する案」「名勝旧蹟其の他の善しき時歴ある樹石並特殊の植物保存及利用に関する建議案」を提出。 以後、瀬戸内海の国立公園化や史跡名勝・文化財の保護を強く訴える。 9月 垂細亜煙草(株)を創立。常務取締役に就任。 史蹟名勝天然記念物保存法が制定される。	1921 年	(大正 10 年)	ワシントン会議(～22)
	1921 年	(大正 10 年)	48 才	8月から数回にわたって瀬戸内海を国立公園とすべき内容を紙面で連載	1922 年	(大正 11 年)	全国水平社結成 イタリアにファシスト政権成立 ソビエト社会主義共和国連邦成立
4期目	1924 年	(大正 13 年)	51 才	5月 香川県より第15回衆議院議員に4回目当選。	1923 年	(大正 12 年)	関東大震災
5期目	1928 年	(昭和 3 年)	55 才	2月 香川県より第16回衆議院議員に5回目当選。 6～11月ベルリン万国議員同盟会議及びバザル万国議員商事会議へ出席。 11月 勲三等を叙し、瑞玉賞を受賞。	1925 年	(大正 14 年)	治安維持法・普通選挙法公布
	1929 年	(昭和 4 年)	56 才	宇佐神社境内に「桜の碑」を建立す。	1927 年	(昭和 2 年)	中国国民政府成立
6期目	1930 年	(昭和 5 年)	57 才	2月 香川県より第17回衆議院議員に6回目当選。 7～8月 北洋漁業視察のためソ連へ出張。	1929 年	(昭和 4 年)	世界恐慌おこる
	1931 年	(昭和 6 年)	58 才	国立公園法が制定される。	1931 年	(昭和 6 年)	満州事変
	1934 年	(昭和 9 年)	61 才	3月 瀬戸内海、雲仙、霧島が第1号国立公園に指定。 6月 (株)水産会社社長に就任。	1932 年	(昭和 7 年)	五・一五事件 国際連盟脱退(33) ドイツにナチス政権成立
7期目	1936 年	(昭和 11 年)	63 才	2月 香川県より第19回衆議院議員に7回目当選。 7月 南洋諸国及びフィリピンへ出張。	1933 年	(昭和 8 年)	アメリカのニューディール政策(～36)
	1937 年	(昭和 12 年)	64 才	3月 衆議院解散	1936 年	(昭和 11 年)	二・二六事件
	1938 年	(昭和 13 年)	65 才	9月「海南詩稿」第1・2篇 1500詩をまとめる。	1937 年	(昭和 12 年)	日中戦争(～45) 中国国民党と共産党とが手を結ぶ
	1940 年	(昭和 15 年)	67 才	3月 満州及び中国へ出張。	1938 年	(昭和 13 年)	国家総動員法
	1942 年	(昭和 17 年)	69 才	12月 栗津村で表彰される。	1939 年	(昭和 14 年)	第二次世界大戦(～45)
	1944 年	(昭和 19 年)	71 才	郷里長尾へ帰住。	1940 年	(昭和 15 年)	日独伊三国同盟 日ソ中立条約 太平洋戦争(～45)
	1946 年	(昭和 21 年)	73 才	1月「海南詩稿」第3篇 600詩をまとめる。	1943 年	(昭和 18 年)	イタリア降伏
	1947 年	(昭和 22 年)	74 才	11月30日永眠。	1945 年	(昭和 20 年)	広島・長崎へ原子爆弾投下、ボツダム宣言受諾一降伏 ドイツ降伏、国際連合発足
					1946 年	(昭和 21 年)	日本国憲法の公布(47施行)
					1947 年	(昭和 22 年)	インドが独立する

6「瀬戸内海国立公園座談会」〔1932(昭和 7)年〕

小西は、1932(昭和 7)年 2 月 20 日の第 18 回衆議院議員選挙では落選したが、同年 6 月 10 日に開催された、香川県関係者による瀬戸内海国立公園座談会には関係者の一人として参加している。この座談会で小西は、瀬戸内海が日本人に認識されてきた経緯や瀬戸内海論を数年かけて執筆した事、瀬戸内海を国立公園にするにあたり屋島・小豆島がその中心となるべき性質をもっている事、国立公園の選定委員の人選については林学者・山林及び植物地質に関する学者などの陸のものに関する学者ばかりで、海に関する学者が一人もいないことは何故かという事を当局者に確認し、山のみ国立公園に制定せず、必ず海も制定しなければならないと訴えた。田村剛にも直接依頼し、各県の国立公園運動より更に一層熱烈の度を加えて、一気に目的を貫徹し、そのために必要な事は何日でも手伝うつもりでいると、瀬戸内海に対する熱い思いを述べている。

7「海南詩稿」〔1938(昭和 13)年〕

小西自身の気持ちを述べた漢詩 1500 詩を第1篇、第2篇として装丁しており、小西がこれまでに訪れた箇所を漢詩で表現している。その中には、瀬戸内海と題した漢詩も数点含まれている。そのうちの一点を紹介すると、瀬戸内海で漁船と外国船が行き来している景色を読んでおり、この詩の光景は『瀬戸内海論』で、小西が挿図として屋島山上の獅子の霊巖から瀬戸内海を描写している風景を思いおこさせるもので、小西の瀬戸内海への思いの一端を感じることができる漢詩である。

3. おわりに

現段階で確認できた小西和と瀬戸内海との具体的な関わり的一端が読み取れる資料は、前章のとおりである。これらの資料から、小西の瀬戸内海に対する意識が変化していることが分かる。

1尋常中学校時代の日記帳では、瀬戸内海は生活の一部として認識していたようであるが、2『瀬戸内海論』序文に記された小西の感情は、瀬戸内海は日本の象徴になりえる要素をもっていることを強く認識したようである。そして、3「外客の招致及び待遇に関する建議案」～6「瀬戸内海国立公園座談会」にかけては、国を挙げて保護していくために必要な事を具体的に示し、その実現に向けて活動した。7「海南詩稿」では、瀬戸内海への郷愁の念を表しているようである。

小西和の瀬戸内海への思いは、現在に生きる私たちにも伝わっており、「瀬戸内海国立公園の父」と称される所以を改めて認識するものである。

参考文献

- 1) 佐山浩 内海の価値を訴えた人々 小西和 田村剛「講演 1 小西和の人物像と『瀬戸内海論』」
- 2) 水谷知生 内海の価値を訴えた人々 小西和 田村剛「講演 2 昭和初期の国立公園指定と瀬戸内海」『輝ける讃岐人 2～小西和、田村剛、大久保甚丞、影山甚右衛門、菊池寛、安井コノ～』(2023) 山陽放送学術文化・スポーツ振興財団
- 3) 山本一伸 「瀬戸内海国立公園の父 小西和」展示資料集(2014)さぬき市歴史民俗資料館